

# 宇宙樹 Yggdrasill



会報 2010年9月号  
復刊 No.185 (2010.9.27 発行)  
北欧文化協会  
112-0014 東京都文京区関口 3-13-4  
TEL (03) 3941-9792  
<http://jsmcnet.com/NCSJ/>

本誌名「宇宙樹」の由来 北欧神話の根幹をなし、天・地・地下の三界を貫く巨大なトネリコ(イグドラシル Yggdrasill)の樹にちなんだもの

協会創立：1949.10.  
本誌創刊：1956.03.

【2010年6月例会報告】

6月25日(金)

『ノルウェーの木造民家』に於ける生活と空間ーフィンランド、スウェーデンとの比較を通して

長谷川清之 (建築家・北欧民家研究家・本会会員)

私が北欧民家の調査・研究を始めたのは、1984年のフィンランドが最初です。4月から約半年間ヘルシンキでアパート住まいをし、ラップランドまでの調査を繰り返し、その結果を1987年に「フィンランドの木造民家」として発表。その後94年から調査を再開、96、98、03、07年と、1ヵ月半から長くて3ヶ月の民家調査を繰り返しました。84年以外はすべて自費で、一人で宿も決めずレンタカーで一回に4~5千キロを走る調査行でした。今回の「ノルウェー木造民家」出版で、北欧の丸太組積造民家3部作と称しているのは、北欧5か国の中で丸太を組み積み上げて建物を造る構法を用いているのは、この3国だけだからです。

**風土と生業:**かつて民家は、その土地に大量に存在し加工しやすい材料を用いて造られていた。その意味で、民家を理解するためには、その背景の自然環境を知る必要がある。北欧の自然風土を理解するには、北欧の研究者たちが緯度によって分けた3つの地域で見ていくのが有効である。北緯66度33分以北の「北極圏」には3国の3分の1前後が含まれ、樹木は低灌木と地衣類のみといってよい。北緯66度33分以南、北緯60度辺りまでの地域を「冬の北欧」と称し、“最も北欧らしい北欧”とも云われ、この地域の樹木は真っ直ぐに伸びた針葉樹・松と白樺が主である。北緯60度以南を「夏の北欧」と云い、“北欧らしくない北欧”とも云われ、スウェーデンの南部とデンマークが含まれ、広葉樹などの樹種が増す。

これら3国の特に「北極圏」と「冬の北欧」地域では、夏と冬で白夜と極夜となる厳しい気候であることは良く知られているが、いずれも氷河に洗われた巨大な岩盤の上に薄い土の層が乗ったような地層であることは意外と知られていない。このことは、ヘルシンキのテンペリアウキオ教会、ストックホルムの地下鉄、ノルウェーの空彫りのトンネルなどに良く現れている。ベルゲンに向かうルートには、自動車道のトンネルでは世界最長、24、5キロのラルダールトンネルも開通している。この岩盤は大

量にあっても、道具の乏しい時代にとっても加工できる代物ではないが、そこには豊かな針葉樹の森があった。

3国の標高差は極端に違い、森と湖の国といわれるフィンランドが一番低く、スウェーデン、ノルウェーと高くなり、国土全体の標高が一番高いノルウェーでは、内陸深く入り込んだフィヨルドに大地が急激に落ち込み、そのフィヨルドに遮られ高低差も激しく、かつて陸路の交通は極めて困難であった。このことがノルウェーでは、民家に地方独自の平面プランを残すことにもなった。

この厳しい自然環境の中でのかつての生業は、3国共林業と牧畜農業が主であった。ノルウェーでは加えて漁業が盛んで、特に干シダラは重要な交易品であった。

**民家の構法と配置:**スウェーデン南部の一部とデンマークを除き、3国共に民家は、豊かな針葉樹の森の存在により、丸太組積構法で造られている。それは本来主を中心に家族総出で造るもので、道具の主役は斧であった。

農場の建物は、家族の生活空間である主屋や倉、納屋、家畜小屋、鍛冶小屋などがそれぞれ独立して建てられる分棟型であり、ほとんど分散型配置である。ノルウェーでは主屋入口側に各種建物で緩やかに囲まれたTunと呼ばれる中庭が存在し、そこは外部の居間的空間で、結婚式、クリスマス、葬送などが行われた。

主屋屋根は切妻型で、芝士、丸太、半割丸太、板などの仕上げの下地に防水材として白樺の樹皮が葺かれる。

**主屋平面プランの特徴:**この構法の主屋平面の原型は、3国共に正方形平面で土間床の中央に平炉がきられた1室住居であった。妻側の入口前に、丸太を立てかけた程度の風除けが設けられたが、後にそれが建築化され入口ホールとなるとその奥も仕切られ3室住居として基本形が生まれる。この時建物入口はホール平側となり、炉は主室入口側角に移され堅型となる。その後寝室や調理室などの必要性が生じると、ホールを

---

挟んで主室反対側、妻側に増築される。直列型平面であり平側への増築はない。この型の平面になると各国の特徴が現れる。フィンランドには立面にもこの型の特徴が表れた民家が現地保存されている。スウェーデンでは主室反対側に、結婚式やクリスマスなどにだけ使われる特別室を備えた平面が現れる。主室には入口ホールを介して妻側から入るのが常だが、ノルウェーには3室型のホールを寝室や調理室にし、主室平側にポーチを設けそこから直接主室に入る主室平入型平面が現れる。これは他の2国には見られない型で、妻側に増築の余地が無い、この国の平地の少ない厳しい地形が関係している。

**主室に於ける領域の存在と境界の表現:**フィンランド・カレリア地方の民家の主室には、入口横の炉の角から相対する壁に向かって頭上すれすれの高さの中空に、2枚の棚板が架かっている。家具配置などの関係を観察すると部屋が4つの領域に使い分けられ、その棚板はそれぞれの領域の境界の象徴として存在し、空間を秩序づける“しきり”の役割であることを発見した。

スウェーデンではダーラナ地方から南部の民家に、炉の角から主室入口に平行に架け渡されたブアーマンズビームと名付けられた梁が存在し、潜らなければ奥へ行けないほど低いものもある。それは馬泥棒など貧しい者を拒絶する役割であり、

奥の大テーブル上にクイーンズバーと呼ばれ彫り物を施されたバーが吊り下げられ、そこが家族の領域であることを象徴していた。

ノルウェーにはそのような建築的な仕掛けは存在しない。しかし家具が領域の境界として存在し、他者との関係を語っていた。平入型平面の主室に置かれた大テーブル前のベンチは、座の両端に取り付けられた軸を起点に背もたれが前後に回転する。主は客を見て共に食事をする客でないと判断すると、背をテーブル側にしておく。客に対して長居は出来ないという無言のメッセージ。部屋の入口脇に残された長さ70cmほどのベンチは、何か見繕う間、物乞いを座らせておく座であった。厳しい環境で他者を追い返しはせず何かもてなす「オーディンの箴言」にもある歓待の精神の表現であった。

ノルウェーの民家には平面プランにも他者との関係にも厳しい自然環境の影響が読み取れる。

(当日スライド135枚映写、A3資料1枚(含平面図8種)配布)

注:妻側=紙を二つに折って被せたような切妻屋根の三角形がみえる側、逆は平側

\* 当日の大使館の対応はノルウェー人の歓待の精神が表れた素晴らしいおもてなしだった。(長)

- 
- ★訃報 5月6日に元理事の坂井義太郎氏が逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。  
8月に会員の金平悦子氏が逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。  
9月20日に会員の大東百合子氏が逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

### 【催し物】

■演劇「ヘッダ・ガーブレル」イプセン作

日時：9月17日～10月11日

場所：新国立劇場（新宿・初台）

問合せ：03-5352-9999

■オルフェイ・ドレンガー（スウェーデン男声合唱団）

日時：10月9日

場所：東京オペラシティコンサートホール（新宿・初台）

問合せ：03-3574-0969

---

### ・【次回例会案内】10月例会

講演：「フェルセンと革命の時代― 没後200年に寄せて」

講師：本間晴樹（東京音楽大学教授）

日時：10月29日（金）18:30～21:00

場所：京橋プラザ区民館（中央区銀座1-25-3）

会費：1000円（正会員は無料）

---